

特別
陳列

「千家十職」―利晶で愛でる伝統の技と美―

平成30年6月1日(金)～7月1日(日)



①



④



⑦



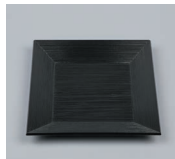
⑩



②



⑤



⑨



③



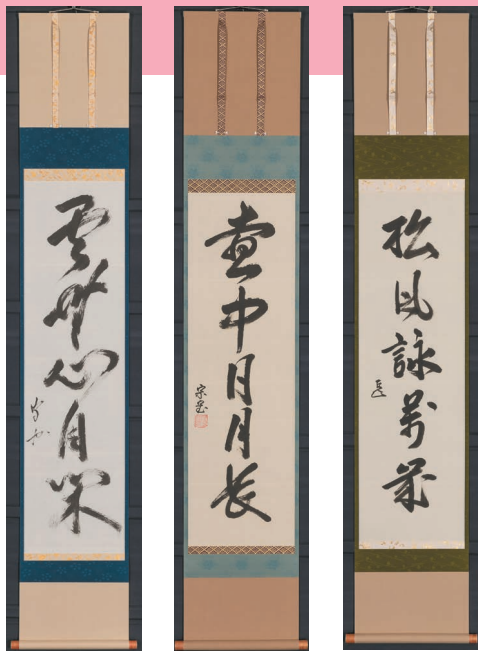
⑥



⑩



⑩



⑧-3 ⑧-2 ⑧-1

【寄贈作品一覧】

- ① 17代 永樂善五郎作「瑞雲二鶴水指」
- ② 15代 樂吉左衛門作「黒樂茶碗」
- ③ 16代 大西清右衛門作「尻張釜」
- ④ 16代 飛来一閑作「元伯好 縁高」
- ⑤ 13代 土田半四郎作「五色詞黎勒」
- ⑥ 13代 中村宗哲作「松唐草蒔絵大棗」
- ⑦ 14代 黒田正玄作「竹一重切花入」
- ⑧ 13代 奥村吉兵衛表具
 - 1 表千家14代家元 而妙斎筆
 - 2 裏千家16代家元 坐忘斎筆
 - 3 武者小路千家14代家元 不徹斎筆
- ⑨ 14代 駒澤利斎作「黒四方盆」
- ⑩ 11代 中川浄益作「利休写エフゴ建水」

企画展
明治150年記念
「茶の湯の復興―幕末・明治の千家茶道を中心に―」

平成30年(2018)は、1868年の明治維新からちょうど150年にあたりました。

新しい時代の幕開けとともに、封建制度が廃止され、日本は新しい国家体制を構築し、欧化主義がまたたくまに社会に浸透し、伝統文化への人々の興味は薄れていきました。



このような時代のうねりの中で、千利休を祖とする表千家、裏千家、武者小路千家の三千家は、17世紀中期より大名家へ茶道役として仕官することで得ていた経済的基盤を失い、苦しい時代を迎えます。

（明治5年頃）三千家の長老であった玄々斎が、「茶道の源意」と題した建白書を京都府知事・長谷信篤宛に提出したことがあげられます。これは、明治という新しい時代を迎え、新政府から茶道が伝統文化として正しい理解を得られないことに対して、「茶道は忠孝五常（儒教の教え）に基づき成立・発展した精神文化である」という茶の精神の目指すところを述べたものです。その後、一指斎も玄々斎の内容をさらに広げた内容の「口上書」を京都府へ提出し、新しい時代における茶道の重要性を説きました。その他の出来事としては、現在も神社仏閣で執り行われる献茶式の始まりといわれる明治13年（1880）の碌々斎奉仕により始まった北野天満宮での献茶式や、天正15年10月1日に豊臣秀吉によって開催された「北野大茶湯」300年を記念し明治19年（1886）に北野天満宮において執り行われた



⑩

本展では、幕末から明治にかけて大きく変化する時代の流れの中で、茶の湯の復興における三千家宗匠の功績を振り返りました。また、新たな活動の場を地方に広げた各宗匠の活躍を、地方ゆかりの茶道具を通して紹介しました。

最初のコーナーでは、幕末・明治に活躍された表千家11代碌々斎、裏千家11代玄々斎・12代又妙斎、武者小路千家11代一指斎の三千家宗匠が共に手を携え、伝統文化の継承者として茶の湯の復興に向け様々な努力を重ねた様子を、関連する出来事や茶道具を通して振り返りました。まず、茶の湯の復興に関連する主な出来事として、当時

最初のコーナーでは、幕末・明治に活躍された表千家11代碌々斎、裏千家11代玄々斎・12代又妙斎、武者小路千家11代一指斎の三千家宗匠が共に手を携え、伝統文化の継承者として茶の湯の復興に向け様々な努力を重ねた様子を、関連する出来事や茶道具を通して振り返りました。まず、茶の湯の復興に関連する主な出来事として、当時

（明治5年頃）三千家の長老であった玄々斎が、「茶道の源意」と題した建白書を京都府知事・長谷信篤宛に提出したことがあげられます。これは、明治という新しい時代を迎え、新政府から茶道が伝統文化として正しい理解を得られないことに対して、「茶道は忠孝五常（儒教の教え）に基づき成立・発展した精神文化である」という茶の精神の目指すところを述べたものです。その後、一指斎も玄々斎の内容をさらに広げた内容の「口上書」を京都府へ提出し、新しい時代における茶道の重要性を説きました。その他の出来事としては、現在も神社仏閣で執り行われる献茶式の始まりといわれる明治13年（1880）の碌々斎奉仕により始まった北野天満宮での献茶式や、天正15年10月1日に豊臣秀吉によって開催された「北野大茶湯」300年を記念し明治19年（1886）に北野天満宮において執り行われた

本展では、幕末・明治という激動の時代における茶の湯の復興について、その兆しが見え始めた時代までを千家茶道を中心に紹介しました。現在の茶の湯は、日本の伝統文化として広く海外でも知られるようになりました。しかしながら、国内ではまだまだ敷居が高く、一部の人ががたしなみ、少し時代遅れの文化と思われているのではないのでしょうか。まさに明治維新の頃のような状況と大変よく似ているような気がします。この度は、茶の湯文化を見直す一助となればという願いを込めて本展を企画しましたが、如何でしたでしょうか。次回のご来館の際には、本展の感想とともに、今後期待する展覧会などについてのご意見をぜひともお聞かせ下さい。（餅原）

昭和33年（1958）に発会した堺ライオンズクラブは、平成30年（2018）に設立60周年を迎えました。その記念事業として、堺でのさらなる茶の湯の発展のために、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家各家元並びに千家十職の各職家のご協力を得て、さかい利晶の杜へ千家十職の茶道具をご寄贈いただきました。

本展では、それらの茶道具を、作り手である各職家のご当代より作品の解説や堺への思いなどをメッセージとして頂き、ご本人のお顔写真とともに展示しました。ご来館の皆様には、作り手自身の言葉を通して、作品の理解が深まり、親しみを持ていただくことができたと思います。また、本展にて初めて取り入れた展示手法ですが、「五色詞黎勒」（画像⑤）の中に入られた芳香を放つカリロクの実の香りを感じていただくために、特設の展示ケースに穴を開け、その穴に顔を寄せると香りを感じていただけるようにしました。はじめてのカリロクの香りに、どこか懐かしさを感じるといってお声が多く寄せられました。さらに、茶道具の展示とともに、千家十職の紹介をはじめ、千利休を祖とする三千家と千家十職の関係性や、400年の歩みなども、パネルや年譜を使用し分かり易く紹介しました。

本展終了後は、この度ご寄贈いただいた茶道具を、千利休茶の湯館において通年で展示します。また、茶会などのイベントを通して広く一般の方々に千家十職の茶道具に触れていただく機会を設ける予定です。（餅原）

企画展

へ与謝野晶子と女性歌人―『みだれ髪』から『チョコレート語訳 みだれ髪』まで―

平成30年4月27日(金)～5月27日(日)



堺を生誕の地とする偉大な近代歌人である与謝野晶子の生誕140年を記念し、晶子の歌人としての輝かしい業績をたどるとともに、晶子とゆかりの深い女性歌人の活躍を紹介することによって、明治・大正・昭和そして平成という時代における女性歌人の軌跡をたどる企画展を、与謝野晶子倶楽部と産経新聞社の協力で開催しました。また、書籍展示では、立命館大学図書館と与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏の協力を得ました。展示は、次の三部構成でした。

【第1ステージ】 明治・大正・昭和に生き、歌う晶子の歌林：晶子の明治・大正・昭和の各時代を代表する歌を紹介するとともに歌集を展示し、晶子の近代歌人としての歩みをたどりました。紹介した歌は、「清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき」(『みだれ髪』明治34年)収録)、「ああ皁月仏蘭西の野は火の色す君も雛髻栗われも雛髻栗」(『夏より秋へ』大正3年)収録)など12首です。

【第2ステージ】 晶子とともに奏でる女性歌人たちの歌典：晶子とゆかりの深い同時代の女性歌人である山川登美子・茅野雅子・柳原白蓮・九条武子・三ヶ島霞子・原阿佐緒・岡本かの子・中原綾

子の代表的な歌を紹介するとともに第一歌集を展示し、女性歌人としての晶子の先駆的な意味をさぐりました。

【第3ステージ】 現代に響く女性歌人たちの歌心：現代に生き、歌う女性歌人である馬場あき子・尾崎左永子・河野裕子・道浦母都子・今野寿美・松平盟子・米川千嘉子・俵万智・永田紅の代表的な歌を紹介するとともに第二歌集もしくは最新の歌集および晶子に関する著作を展示し、晶子短歌の魅力がいまなお現代の女性歌人たちに息づいていることを明らかにしました。

来場された方々にはアンケートの協力をいただきました。以下、いくつかを紹介させていただきます。

▼近代／現代まで幅広い詩人を取り扱っていた点がよかった(20代女性) ▼小さな部屋にパネルと初版本の展示でコンパクトに要点



を得た内容で非常にわかりやすかった(60代女性) ▼胸にグッとくる歌で今度読んでみようと思った(10代女性) ▼(パネルの歌の傍らに) 現代語訳がついているとより楽しめたかもしれません(40代女性) ▼女性歌人の歴史の流れを分かりやすく知ることができた(20代女性) (赤澤)

りを感じるだけでなく、その生き方が分かる数少ない資料となっています。なかでも「さかい利晶の杜」開館後初めて展示した晶子愛用の和洋筆筒は、西洋風なデザインでサイズも大きいため見てたえがあり、展示にメリハリができました。

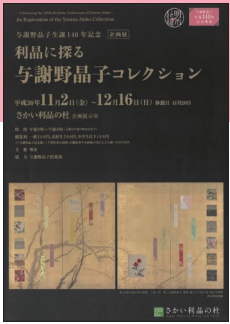
第4章 富村コレクション

晶子を敬愛し、顕彰活動を行った実業家、富村俊造氏から寄贈された貴重な資料群を紹介しました。なかでも、与謝野夫妻の弟子で満鉄総裁であった小日山直登旧蔵資料や希少価値の高い雑誌『冬柏』合本は、ほとんど研究されていない昭和期の晶子の活動を知る貴重なものです。富村氏が晶子研究の後進の育成のため「研究者の交流と学習に役立ててほしい」という願いをこめて寄贈されたこれらの資料は、研究資料としても幅広く活用できる貴重な資料群です。

以上のように、晶子生誕140年の記念展として、堺市博物館所蔵の晶子コレクションの特徴と意義を明らかにできたことで、今後さらに堺市が晶子顕彰・研究の拠点として認知され、資料が活用されることを期待したいと考えています。

また、企画展の内容をまとめた解説パンフレットを制作・刊行しました。与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏にご寄稿を得るとともに、共同研究の成果を含めた充実した内容となっております。会期終了後もさかい利晶の杜にて販売しています。

(森下)



企画展

へ利晶に探る 与謝野晶子コレクション

平成30年11月2日(金)～12月16日(日)

堺市では、これまで晶子の親族や弟子などゆかりの人々が所蔵していた晶子の遺品や書をはじめ、さまざまな資料を収集してきました。これらの資料は、堺市博物館・堺市文化課・堺市立中央図書館で

所蔵、管理していましたが、平成27年(2015)に「さかい利晶の杜」開館を機に、堺市博物館で一括保管されることになりました。これらの資料を、平成30年度より、与謝野晶子倶楽部と共同で調査研究を行い、その成果を企画展で紹介しました。その結果、今まで以上に充実した内容となり、来館者の方々にも大変満足いただけました。

本展では、特に、晶子と関係の深い人々が所蔵していた貴重な資料を中心に展示し、その背景を紹介することで、堺市博物館が所蔵する与謝野晶子コレクションの意義を知っていただく機会となりました。

展示内容は、特徴的な資料群を4つに分けて構成しました。

第1章 晶子の堺時代資料

晶子の実家である鳳家の旧蔵資料や駿河屋関係資料をはじめ、晶子が堺時代に作品を掲載した文芸誌などを紹介しました。このうち、共同研究によって、駿河屋の帳簿内容が明らかになり、駿河屋で作っていた菓子名などが判明しました。また、

第3章 晶子旧蔵資料

与謝野家をはじめ、晶子と近い人々が所蔵していた資料は特別な意味を持ちます。特に末娘の森藤子氏が所蔵していた原稿類は、晶子最後の集大成『新訳源氏物語』の草稿や、父である与謝野寛の草稿や愛用資料といった重要な資料群です。また、与謝野夫妻の弟子たちが受け継いだ愛用の品々は、晶子の温もりや与謝野家での暮らしぶ

企画展

へ与謝野晶子の満蒙旅行（初公開書簡を中心に）

平成31年2月20日（水）～3月24日（日）



平成30年は、与謝野晶子が夫の寛ととともに旧満州と内蒙古（中国）へ旅行に出かけて90年となります。

この旅行は、南満州鉄道株式会社（以下、満鉄）の招待によるもので、昭和3年（1928）5月5日から6月17日までの約1か月半に及びました。晶子はこの旅について「私は唯だ随意に歌を詠めばよいと云ふ条件のもとに招かれて行くのですから、全く有難い旅行をさせて頂くのです。この序に、私の殆ど知る所のない支那の自然と人事の一端にも触れて来たい」（『座談より』『横浜貿易新報』1928年5月6日）と述べており、旅に期待を寄せている様子がうかがえます。そして帰国して2年後には、夫との共著で紀行詩歌文集『満蒙遊記』を刊行しました。



この旅行で与謝野夫妻の世話役を務めたのが満鉄社員の古

澤幸吉でした。幸吉が長女松江を文化学院に入学させたといふ晶子に書面を送ったことから、家族ぐるみの交流が始まりました。

本展では、古澤家のご厚意により、与謝野晶子と寛が古澤幸吉に宛てた書簡をはじめ、晶子・寛自筆の歌掛軸や色紙などの資料をお借りして展示しました。また、満蒙旅行で撮影された写真や満鉄関係資料なども合わせて展示し、晶子がこの旅

与謝野晶子記念館内では、以下の記念事業も行いました。

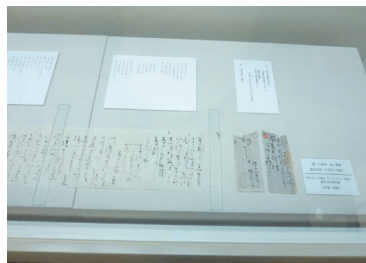
特別資料展示「与謝野晶子と鳳家の人々」

平成30年5月23日（水）から6月18日（月）

本展では、晶子が堺時代に兄秀太郎の妻玉枝に宛てた書簡を、秀太郎のご遺族の御協力により初めて公開しました。

書簡には、晶子と兄夫婦をはじめとする母や妹といった家族との親しい交流の様子がうかがえます。

与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏のご協力を得て読み解いたところ、明治31年（1898）7月11日、晶子19歳の夏に



行で何を観て何を感じ、その体験が昭和期の活動にどのような影響を与えたかを明らかにしました。これまで、与謝野晶子と寛の満蒙旅行については、『満蒙遊記』の記述や詩歌でたどるしかありませんでした。しかしこのたび貴重な書簡を展示することで、特に昭和期の晶子の活動を知る重要な手掛かりとなり、ますます研究がさかんになることを期待しています。あらためて、多大なるご協力を賜りました古澤家の皆様に心よりお礼申し上げます。

（森下）

書かれたものと推定でき、今まで発見された書簡の中で最も古いものと思われま

当時の晶子が詠んだ未発表の歌も含まれていることから、多くの関心が寄せられました。

与謝野晶子の新しい動画を公開

与謝野晶子と寛の御令孫である与謝野馨氏が、ご生前に与謝野晶子記念館で活用してほしいとご寄贈いただきました晶子の動画のうち、福島県を旅するものを初公開しました。開館以来、孫を抱く晶子の日常の姿を観ていただきましたが、このたびの動画では晶子の旅での様子がわかります。晶子が玄関先から出てくる場面では、とてもにこやかな表情をしており、来館者の皆様もより晶子に親しみをもっていただけました。平成30年4月27日から常時公開しています。

（森下）

●与謝野晶子倶楽部との共同研究会

平成30年度は与謝野晶子生誕140年の記念すべき年であることから、堺市博物館と与謝野晶子倶楽部が連携して、晶子関連資料の調査研究を行う「共同研究会」を発足しました。具体的には、与謝野晶子倶楽部に在籍・関係する学識経験者と博物館学芸員が協働して、堺市博物館が所蔵する与謝野晶子関連資料の学術的な調査研究を進め、その成果を企画展に活かし図録などで発表しました。

与謝野晶子倶楽部からは、太田登氏（与謝野晶子倶楽部会長・天理大学名誉教授）をはじめ、田口道昭氏（与謝野晶子倶楽部運営委員・立命館大学教授）、中周子氏（大阪樟蔭女子大学教授）・加藤美奈子氏（就実短期大学准教授）・松浦あゆみ氏（京都女子大学非常勤講師）・山下奈津子氏（和歌山市立博物館学芸員）・川勝美佐子氏（元堺市博物館学芸員・福澤敬子氏（元柿衛文庫学芸員）・足立匡敏氏（甲陽学院中学校・高等学校教諭）・



竹田芳則（堺市立北図書館館長代理・司書）にご参加いただきました。

昨年度末に準備会を開催し、本年度から本格的に共同研究会を行いました。第1回会議は6月15日で、共同調査研究の進め方、与謝野晶子生誕140年記

念企画展（秋）について議論いたしました。まず、進め方については、企画展を4章に分け、研究グループも4つに分けて、太田氏と森下が各グループに説明、意見交換いたしました。博物館学芸員は、当面資料の整理に専念し、来歴などを調査・リスト化を行いました。展示資料の絞り込みを行い、提出期限を設けました。資料1点につき200字前後の原稿を依頼しました。また、記念講演会は、山下氏と竹田館長代理にお願いいたしました。

第2回会議は8月31日に行い、与謝野晶子生誕140年記念企画展（秋）について話し合いました。企画展のチラシ完成の報告、企画展の展示構成の説明、図録の割付表と分担表を配布し、文字数や表記の統一などを確認しました。

第3回会議は、12月21日に行い、本年度の調査研究活動の総括と来年度の展望について話し合いました。また、企画展「与謝野晶子の満蒙旅行」の進捗報告や、来年度の晶子春の企画展の「『新新訳源氏物語』完成80年記念展」の説明を行いました。

来年度秋の企画展が『新新訳源氏物語』刊行80年の記念の年であるため、本格的な研究部会を行いました。1月11日に、太田氏をはじめ担当者の中氏と松浦氏が中心となって話し合いました。主に「源氏」研究活動の方向性について話し合い、まずは「桐壺巻」を集中的に調査研究することになりました。その成果を「報告書」という形で作成し、この機会にまとめることを目指しています。

（森下）

●平成30年度 新収蔵資料の紹介

本年度は、総数12点の寄贈がありました。まず、与謝野百合子氏（晶子の御令孫）より美しい晶子自筆の、歌掛軸と歌短冊を4点、山田和子氏（晶子の御令孫）より木目込み雛人形とお雛様の晶子自筆歌掛軸や寛自筆資料など4点、鳳英里子氏（晶子の兄の鳳秀太郎の御曾孫）より晶子の兄・鳳秀太郎の肖像写真1点、山田紀子氏より新潟の風景を詠んだ晶子と寛合筆の歌掛軸1点「張福」より晶子の歌が織り込まれている大島紬を1点、平野美都子氏より晶子自筆歌短冊等貼交屏風1点をご寄贈いただきました。

特に、山田和子氏からご寄贈いただきました木目込み雛人形は、和子氏のお母様エレンヌ氏（晶子の五女）が和子氏の初節句に晶子から贈られた美しいものです。また、晶子自筆歌掛軸「白蘭の蕾のごとくあてやかに雛のはかまはふくらめるかな」（歌集『太陽と薔薇』収録歌）も合わせてご寄贈いただきましたので、お雛様の季節に合わせて公開させていただきたいと考えております。

（森下）



特別陳列 千家十職―利晶で愛でる伝統の技と美―

関連講演会 & キッズプログラム



6/9(土) 筒井紘一氏講演会
「千家十職の成立」

講師に茶道研究家で、茶道資料館顧問の筒井紘一氏をお迎えしました。

「千家十職の成立」と題し、各職家と千利休並びに三千家とのかわりなどについて、それらに関連する歴史的人物や事項などとともに、現代の話なども交えながら大変わかりやすくお話しいただきました。また、茶の湯の歴史や茶道具にまつわる興味深いエピソードなども、ご紹介いただきました。会場には終始笑いが絶えず、筒井氏のユーモアあふれるお話に、80名もの参加者は引き込まれている様子でした。



6/23(土) 中村宗哲氏
キッズプログラム
「うるしの茶道具づくり」

講師に、千家十職の塗師である13代 中村宗哲氏をお迎えし、小学生高学年を対象としたキッズプログラムを開催しました。プログラム前半では、中村家の歴史や千家十職の紹介に始まり、漆を使用して作られる茶道具の工程や中村家歴代の作品などを、スライドを使いわかりやすく説明し



ていただきました。後半では、参加者はなつめ（茶器）の製作工程の見本や道具類などを実際に手に取り、中村氏に積極的に質問をし、子どもたちが一つ一つの答えに目を輝かせて聴き入る情景は、大変印象的なものでした。

9/29(土) 生形貴重氏講演会
「近代の茶の再出発」

講師に、千里金蘭大学名誉教授で、表千家不審庵文庫運営委員の生形貴重氏をお迎えしました。

「近代の茶の再出発」と題し、表千家11代家元碌々斎の諸活動を中心に、時系列に沿ってお話しいただきました。

また、生形氏のご祖父で、碌々斎の門人であった生形貴一氏（朝



宗庵）が残されたお話しなどを交え、碌々斎と数寄者との交流や、明治の茶の湯の状況などをわかりやすく説明いただき、参加者はみな熱心に耳を傾けている様子でした。

10/8(月祝) 伊住禮次朗氏講演会
「千家茶道の近現代史」



講師に、茶道資料館副館長で、今日庵文庫長の伊住禮次朗氏をお迎えしました。まずは茶の湯と茶道の違いのお話に始まり、千利休を祖とする三千家の成り立ちや、各千家の代名詞とされる茶室を紹介いただきました。このような千家茶道の基本情報をふまえ、近世から近代という激動の時代の流れの中で、変化していく茶の湯について、同時代に活躍された裏千家11代家元玄々斎ならびに12代家元又妙斎の諸活動を中心にお話しいただきました。

企画展 与謝野晶子と女性歌人―「みだれ髪」から「チヨコレート語訳 みだれ髪」まで―
展示解説



5月3日（木・祝）に、与謝野晶子倶楽部会長の太田登氏をお迎えし、展示解説を行いました。当企画展の監修をいただきました太田氏が、与謝野晶子の代表歌とその背景を合わせて詳しくご説明いただきました。また、晶子とゆかりの深い山川登美子や茅野雅子をはじめ、明治・大正・昭和そして平成を代表する女性歌人について解説いただき、参加者からも現代の女性歌人の流れがよくわかったという感想をいただきました。

書籍『与謝野寛・晶子の末娘が紡ぐ父母の想い出』の出版

与謝野寛と晶子の末娘である森藤子氏は、両親との回想を、数多く残されました。また、堺市における与謝野晶子顕彰

にも大きく貢献していただき、記念講演なども数多く担っていただきました。晶子生誕140年を記念して、森藤子氏のご長女浅野脩子氏と与謝野晶子倶楽部のご協力のもと、森藤子氏の言葉を紡いだ書籍を出版しました。現在、さかい利晶の杜のみで販売しております。

企画展 利晶に探る 与謝野晶子コレクション

記念講演会

11/11(日) 山下奈津子氏 竹田 芳則 講演会
「与謝野晶子と堺
〜与謝野晶子コレクションを中心に〜」

与謝野晶子倶楽部との共同研究会に参加していただいている山下奈津子氏（和歌山市立博物館学芸員）と竹田芳則（堺市立北図書館館長代理）のお二人にお話しいただきました。

料にみる晶子の実家・駿河屋と題して、駿河屋の歴史や堺駿河屋の帳簿の解説によって明らかにした菓子についてお話しいただきました。なかでも、総本家駿河屋300年を祝した記念歌集に晶子の歌が掲載されていることには、受講者の方々も大変驚かれています。



竹田館長代理には、晶子と堺について、貴重な戦前の史料などの画像を織り込みながらお話しいただきました。また、晶子が堺時代を回想した「私の生ひ立ち」に沿って、堺の地図を紹介しながら説明いただき、あらためて少女の頃の晶子が見ていた風景がよく分かりました。

企画展 与謝野晶子の満蒙旅行〜初公開書簡を中心に〜 記念講演会

「与謝野寛・晶子の満蒙旅行」 平成31年3月21日（木・祝）
講師：田口道昭氏（立命館大学教授）

湊焼について

増田 達彦

◆はじめに

湊焼は江戸時代に堺で焼かれた焼物です。全国的には著名とは言えないものの、香合を収集したカナダ・モントリオール美術館のクレマンソー・コレクションにも湊焼の作品が含まれており、優品と認められる焼物も生産していました。焼物辞典等にも掲載されていますが、その概要はおおよそ

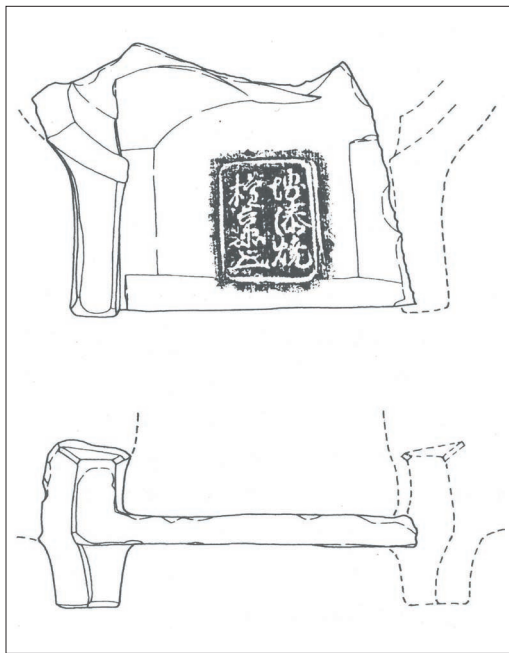


写真①

◆資料にみる湊焼

それでは湊焼の作品で、年代をさかのぼることができる資料を見ていきたいと思います。

まず、絵画資料では文化一〇年（1813）に刊行された『五畿内産物図会』和泉之部に褐色の湊焼土瓶が堺の土産物として描かれています（写真①）。『五畿内産物図会』は各地の名所名物を紹介するガイドブックのようなもので、このような球形の土瓶は伝存するものに



写真②

も似たタイプを目にすることができます。

発掘調査では、兵庫県伊丹市の江戸時代酒造業で栄えた伊丹郷町遺跡第五三次調査で湊焼の素焼きの土風炉片が見つかっています。この土風炉には「堺湊焼権兵衛」の刻印があり、いっしょに出土した他の陶磁器等から一八世紀中頃の年代が与えられています（写真②）。この「堺湊焼権兵衛」の刻印は他では見つかっていません。

文献資料では井原西鶴の『世間胸算用』元禄五年（1692）に「湊焼の石皿五枚」という記述がみられます。長屋に住む人たちが大晦日に生活道具を質屋に入れてお金を工面し無事正月を迎えるという話の中に出てくるのですが、普段着ている帯や升などを含めて合計二三品を質草にして一匁六分借りています。この一匁六分を現在のお金に換算するのは難しいことなのですが、当時比較的高額な給金であった大工の日当が2〜3匁だっ

たようなので、質草の量に比べると僅かな額と考えていいでしょう。その中に湊焼の皿が五枚含まれています。元禄の頃の湊焼については全く分かっていません。しかし、ここから元禄頃には湊焼が存在し庶民が普段使いするようなもので、西鶴が書く浮世草子に登場するよく知られた製品だったことがわかります。石皿は一般的には瀬戸焼等で生産された江戸時代後期に使われた大振りの日常使いの皿で、煮しめなどを大盛りにして使われたような皿です。一七世紀代では石皿と呼ぶ陶器はあまりありませんが、石皿と呼ぶ限りは釉を掛けた焼物で、この時期に湊焼ですでに釉を掛けた焼物が作られていたと考えることができます。それではこの皿はどのようなものなのでしょう。か



写真③

刻印もほとんどなく、それまでの「かわらけ」と呼ばれる土師質皿の系譜はひかないものの近郊の新たな窯で作られた製品だろうといふべしでとらえられていました。まだ確証を得ることはできませんが、西鶴が記した湊焼の石皿の候補としてあげたいと思います。



写真④

の作風の特徴は細工物にあります。海老型の向付は型物で、赤楽風に仕上げ裏面には海藻の文様を型押ししています（写

◆吉右衛門と吉兵衛

湊焼の窯元の二つとして上田窯がありました。この窯は先に記した御室からきた工人が開いた窯を祖とするという窯で、文久元年（1861）に亡くなったとされる七代上田吉右衛門の作品が多く残っています。作品には「泉州堺本湊焼吉右衛門」という角印が押されているものがあり、吉右衛門の作品と判断しています。緑釉や黄釉といったいわゆる交趾釉などをきれいに使った手鉢（写真③）や土瓶・鉢子や、薄く透明釉を掛けた涼炉などが見受けられます。また、恐らく懷石で使ったような数皿もあり、いずれも端正で丁寧な作り方になっています。七代の息子であり明治三九年（1906）に亡くなった八代吉右衛門の作品も多く残っています。

この上田窯の親戚で長浜屋吉兵衛という陶工もいました。吉兵衛は1840年代から1870年頃まで作陶していたようで、角印では「泉劔堺本湊焼吉兵衛」あるいは「泉劔堺本湊焼」を用いて

いました。その作風の特徴は細工物にあります。海老型の向付は型物で、赤楽風に仕上げ裏面には海藻の文様を型押ししています（写

真④）。一〇枚一組になっています。他にも写実的に作った鮑型の皿は細かく精巧に作っており、こうした細工を得意にしたのだと考えられます。正木美術館所蔵の酒呑狸々という置物も彼の作品です。

◆おわりに

湊焼の創始は恐らく日常器の甕や壺、火鉢や炮烙や皿などを生産していた中で、京都などからの技術が伝わったり陶工を招いたりして発展し、施釉陶器を生産し始めていったと考えられます。その中で技量の卓越した工人が現れ、当時の堺の富裕な人々からの求めにより茶器等を作ったと考えられます。しかしながら湊焼はその成立からどのような沿革があったのか、まだまだわかっていないことがたくさんあります。戦争の空襲により多くの資料が失われており、その解明は難しいことも多いようです。しかし、まだ知られていない作品が数多くあります。湊焼の実像を露わにするためには、後に昭和になって湊焼の廃窯が続く中、新たに製作された復興湊焼の作品も含め、改めて一点一点の資料を丹念に追いつけていくことが必要だと考えています。

参考文献

- ・新屋隆夫『堺陶芸文化史』1985年 同朋舎出版
- ・川口宏海「伊丹郷町遺跡出土の湊焼」『藤井克己氏追悼論文集』同書刊行会 1997年
- ※石皿については、香雪美術館学芸課長 梶山博史氏より有益なご助言をいただきました。記して感謝いたします。